

研究テーマ：生徒が意欲的に取り組める授業への工夫と改善

所属 高知県立山田高等学校

氏名 木村 恒子

R G S H 6

1. 研究の背景

1 年生習熟度クラス。2 クラスを **advanced**（1 講座）、**standard**（2 講座）の計 3 講座に分け、それぞれの理解度、進度で授業を行う。担当は **standard class**。とても元気がよく、明るい活気のあ
るクラスである。しかし、英語への関心は低い。

2. リサーチ・クエスチョン

生徒が意欲的に取り組める授業とは

生徒の興味をひくためには、教材研究以上に教え方の工夫が必要になる。様々な方法を取り入れ
ながら、少しでも生徒が意欲的に取り組める授業をめざしたい。



3. 予備調査

- ①授業観察の結果：学習意欲はあるが、英語への興味・関心・理解度は低い。発言は皆、何の抵抗
もなくできる。
- ②生徒の学習意識(アンケートの実施)：「英語はどうすれば得意になるのか。」「苦手なのでやる気
がおこらない。」「英語ができるようになりたい。」という回答を得た。一部の生徒の中にある英
語に対する向上心・向学心・苦手意識。これをどう目覚めさせ、払拭するか、これからの変化が
楽しみだ。
- ③英語力を示すデータ（第一回校内課題テストの実施）：普通科 1 年生の平均点は 23.3 点。その結
果に愕然とした。もちろん 100 点満点のテストである。基礎力を問うものが出題されていたが、
高校入試を終えたばかりの生徒たち。いかに基本的なものが定着していないかを物語っている。

4. 仮説の設定

英語が理解できればやる気と活気はわいてくるのではないだろうか。

↓ そのために・・・

- ・ 正確な単語の知識＋集中力を高める。
- ・ 家庭学習の定着。（復習を中心に次回へとつなぐ。体で学習する一番の近道、音読を取り入れる。）
- ・ テキスト理解とポイント見極め。
- ・ 定期的に単語テスト（比較的易しい単語から始める）を実施。（達成感・充実感。）
- ・ 自発的な発言を促し、自ら考える力のステップにする。（発言ポイント制）
- ・ 自己評価カードを作成し、毎回自分の学習態度を振り返る。振り返ることが次回へのプラスに。

5. 計画の実践

- ・ テキストを使って音読(リピート・シャドーイング)etc.練習。ポイント文はまず全文を板書し、全員で
発声。2 回目以降は部分的に単語を消していく方法で定着をはかった。ゲーム感覚で生徒は英文を暗
記できた。1 回目⇒We can also understand what is important to its people. 2 回目⇒We can also
understand___is important to its people. 3 回目⇒We can also understand___is important to

its____. …(最後には黒板には何も書かれていない状態になる。)リズムカルにテンポ良く進めていくと、全員が黒板に注目する。数名の生徒の頬は興奮で？赤らんでいた。

- ・ウォーミングアップに日常会話を取り入れた。
- ・集中力、単語力、発声を身につけるため、単語カードを作り(新出単語)、一斉読み、意味確認をそのレッスンが終わるまで繰り返した。単語練習には時間をかけ、完全習得に励んだ。
- ・テキストのパートごとに、半和訳プリントを事前に作成。導入時にそのプリントを配布。個人のペースでやらそうとしたが、しんどいようなので結局一斉進行する形をとった。生徒は教科書とプリントを照らし合わせながら必死でプリントに記入していった。
- ・月に一度、事前にB 4 裏表で単語集を作成し、配布。2 5 点満点のテストを実施。
- ・自発的発言ポイント制は、もともと発言することに何も抵抗を感じないクラスだったので、すんなり受け入れられた。学期末に集計し、成績に加味。
- ・「自己評価カード」は、時間的に余裕がなく、記入が抜かる日もあった。盛りだくさんではいけないことを反省。しかし、生徒のナマの声を聞くことができ、教師の評価カードにもなったように思う。

6. 実践の結果

中学校から練習をしているので、聞き慣れた単語やあいさつ文などは抵抗なく受け入れられた。シャドーイングはレベル的に無理があった。単語カードを使うと、全員が顔を上げ、発声もよくできる。表情がよくわかるので、つまづく場所も把握しやすい。半和訳プリントを活用し、授業への積極的参加の姿勢が見られた。全文和訳より自分で考えながら作業するので、レベルによっては効果的であることを実感する。授業中のがんばりを評価につなげたい!という意識を持つ生徒は積極的に挙手をし、ポイント制を大いに活用、評価アップにつながった。

7. 結果の検証

単語練習などで声も大きく、活気ある授業にはなったが、全ての注意力が授業に向いているとは言えなかった。新出単語については皆きちんと習得できた・・・はずだが、テストでは点数につながらない。発音と文字がうまく頭の中で結びつかず、書くことへの抵抗がまだ残っている。そのことは単語テストの結果を見てもわかる。単語テストを取り入れることによって、今まで定期テスト前だけの家庭学習だったのが、「土日、家で勉強したよ!」という発言が出るようになった。しかし、思うような成果は得られず実力アップには程遠いものになっている。1 学期はパートが終わるごとに日本語訳を配布していたが、単調なパターンを見直そうと和訳先渡しを考えた。しかし、和訳を先に渡してしまえばそれだけで安心し、授業での取組がおろそかになるのではという不安から、半和訳先渡しに挑戦した。わずかな手ごたえはあった。全員が自信を持ってテキスト読解に取り組んでいたようだ。ただ、いつもと少し違う進め方に、理解しきれない生徒は四苦八苦していた。コツさえつかむことができれば、生徒にとって良いエクササイズになりそうだ。

8. 成果と今後の課題

毎時間、ギューギューの状態で行っている。4 5 分という短時間の中でできることは限られる。事前にかなりポイントをしばっておかないと、こちらにも余裕がなくなり、結果生徒への学習態度にも響いてくる。学期末のアンケート結果を見ると、授業での理解・取組は生徒たちなりに良くてきたという回答が8割、意欲的に取り組めたという回答も同じく8割で多いのだが、まだまだ英語に対する抵抗感・苦手意識はぬぐい去られていない(3割強の生徒が、「英語にはあまり興味がない」、もしくは「苦手で嫌いだ」と回答)。意欲＝実力にはまだまだ至っていないようでもある。

様々な仮説に沿って実践を試みてきたが、何がどう効果的であったかを見極めるには、もう少し時間がかかりそうだ。授業や家庭学習にどう音読を取り込んだら良いか、書くことへの指導はどう工夫すればよいのか、活気ある授業作りのために、また新たな課題を発見したようである。